

習近平の時代

渡辺利夫

(公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇二〇年十二月、退任。二〇一七年六月より現職)。

毛沢東による「反党批判」を受けて國務院副総理の座を追われ、十六年にわたる軟禁、投獄を経て文革終了後に名誉回復、全人代常務副委員長にまでの

ぼりつめた改革派の中心人物が習仲勲であり、習近平はその子息である。習近平は二〇一二年十一月の第十八回党大会後に党総書記という最高位を射止めた。氏の権力掌握に父親の存在が大きな影響力をも

ったはずだが、不思議なことに氏は父親を悲劇に追いやった毛沢東に強い憧憬しやうけいの念を抱き、文革という狂気に中国を再び貶おとしめてはならないという父親の信念に沿うこともなかった。文革中は山間部に下放さ

れ想像を絶する逆境を生き抜いたことをみずから「成功体験」とし、むしろ毛沢東が自分のすべてであるかのように考える人物が習近平だという見方が、城山英巳氏の「愛憎過巻くファミリーの歴史」(『文藝春秋』十一月号)である。出色の人物論であろう。

第二十回中国共産党大会後の重要会議において習近平は二期十年という慣例を破って三期目の党総書記となることが決まり、加えて七名からなる最高指

導部を習近平に忠誠を誓う側近で固めた。鄧小平時代に確立されたかにみえた集団指導体制は崩れ、新たに習一強体制というべき独裁体制が誕生した。

習近平の一貫したスローガンが「中華民族の偉大なる復興」という中国の夢の実現である。対外的には台湾統一であり、国内的には「共同富裕」社会の実現がそのエッセンスである。

市場経済化の過程で中国の経済は大きく膨張したものの、高所得者層の富は増大する一方、中所得者層はなお薄く、低所得者層の不満は溜たまりつづけている。皆が豊かになる。共同富裕社会の実現が不可欠だと習近平は考える。「和諧社会」の実現をスローガンとした胡錦濤時代のみならず、習近平の第一期、第二期党総書記時代においてもなお進んだ社会的不平等の克服は容易なことではない。社会のあらゆる組織単位の中に強権的な共産党組織をつくり、その指導のもとで不平等を矯ためていこうというのが習近平の方法論なのではないかと私は想像する。毛沢東時代の再来なのか。